

【文芸時評】

「心が出ちゃったんだな」

横尾和博

「この国にはなんでもある、ただ希望だけがない」。二〇〇〇年七月に刊行された村上龍『希望の国のエクソダス』のなかのフレーズである。それから十年経った。バブル後退後の失われた十年、アフガニスタンとイラクでの二つの戦争、社会間格差を激化させた新自由主義…、私たちはこの時代のまっただなかに希望の光を求めて蠢いている。

しかし、この閉塞感鈍色のまま出口が見えない。昨年夏の政権交代、チェンジの一陣の風も現実に押しつぶされ、政治シーンにはさらに危険な足音が近づいている。

文学の場にも、この閉塞感が漂っている。ただひたすら自分の足場をしつかりと固め、状況に対峙しているのは村上春樹だけと言っても過言ではない。いつも書くことだが、「対峙」とは左翼的言語を散りばめたり、勇ましい民族主義的な論説のことではない。「いま、ここ」、時間と空間を一身に受け止め、文学的に内化させ、作品に結晶させることだ。

今年一月の芥川賞候補の松尾スズキ「老人賭博」では、賭博に取り憑かれた男たちの「心が出ちゃったんだよな」という言葉が印象的だ。賭博もそうだが、他者との距離感、閉塞社会への鬱屈など、容器としての身体に収まりきれない、心が見出してしまおうのがこの時代の特徴である。この内面の過剰さを描くのが文学であると私は確信する。

さて今年前半の収穫は、前述の村上春樹「1Q84」BOOK3、高橋源一郎『悪』と闘う、中村文則「悪と仮面のルール」、島田雅彦「悪貨」、阿部和重「ピストルズ」、浅田次郎「終わらざる夏」などである。特に「文学界」8月号の相馬悠々のコラムでは「悪」をめぐる今年の文学作品の特徴を述べている。「悪」の概念をどのように考えるかは文学の基本的な問題であり、人間観察のかっこうの素材である。

「全作家」前号（78号）掲載の対談で、「三田文学」編集長の加藤宗哉の真摯な発言に脱帽である。居丈高な言説が多い文壇、論壇ギョーカイで、彼は奢らずにただ作品の優劣を「技術論」の視点から控えめに述べている。慧眼だ。多くの読者は、なるほどと感じたのではないか。未読の方のために一部分を紹介すると、登場人物の心の内側を説明文で書いてはいけない、ということだ。また彼は同人雑誌の果たす役割を明確に規定している。「一つでも多くの文学の結実」である。

さて同人誌について私見を述べる。本稿は七月中旬に筆を執っているので、その時点で編集部から届いたものが対象となっている。雑誌発行時期と批評時期の遅れはお許しをいただきたい。

「海」（四日市市）81号は、小久保修「出かけない朝」。三十年間高校の教師だった男がうつ病にかかり休職中のいまを描いた。淡々とした日常のなかに現実と幻想が幽かに揺れていて秀逸。紺谷猛「墨色の濃淡」、二十四時間操業の化学工場で働く男は、機械の不具合で夜中も呼び出されるような生活を送っているのだが、ある深夜呼び出されて、三年前職場で機械の故障が原因で失明の危機に陥った仲間の事故のことを回顧する。大企業の労働安全を素材にしながら墨色に比喻された人生の濃淡を描く。また白石美津乃「白い象」もテンポがあっただけおもしろく読んだ。一見幸次「浅田次郎『鉄道員』」も、ちょうど浅田さんと一緒に仕事をした時期だったので興味深く読んだ。

「九州文學」10号では野沢薫子「沈む……沈む」。十八歳のときに勤めていた会社の工場長の息子に誘惑され妊娠出産した女性がその子どもをコインロッカーに捨てようとして二十歳以上も年上の男性に助けられた。彼は名家の社長で、彼女を妻に迎え、ロッカーに捨てようとした赤子を実子として入籍してくれたのだが……。女の孤独と、他者との距離感、崩壊の感覚など豊かな感性に支えられている。同誌では六十五歳になって沖繩に移住しようとする夢破れた劇団員の男の鬱屈を描いた堀勇蔵「赤い夕日に照らされて」、戦争を扱った池部正臣「六年兵はなみだした」の二編が、背後にある物語を照射しすぐれている。

「小説藝術」51号、竹森仁之介「呼ぶアメリカ大陸」は著者のライフワークである移民を素材した連作集。伝えるべき何かを著者は信念として持っている。そのモチベーションに毎回感動させられる。同誌はほかに羽鳥善行ほか毎号達者な顔ぶれである。

「彩雲」3号、「光のあと」樽林守は戦後開拓民として十八歳で家族の身代わりに働き、いまでは順風満帆の男の老後に日本経済の不況が影を落とす。題名と主人公の妻が語る、満ち足り過ぎを戒める「十分はこぼれる」との寓意が光る。

「高知文學」36号の米沢朝子「水際まで」は第五回全作家賞受賞作品なのでここでは詳述しないが、人間の本質を抉る深みがある。ほり啓『象の消滅』あるいは世界の顕現」は村上春樹の短篇「象の消滅」論で、象徴と比喩の解説につとめ「意味の消滅」に論を運ぶ。村上春樹を推す私としては大いに参考になった。

同じく評論では「風の森」12号、皆川勤「物語としての〈歌〉中島みゆき・断想」が、中島みゆき論として「言葉の持つ身体性」に注目して秀逸。

「札幌文學」75号は創刊六十周年の記念号ともなっていて小説も多く力作ぞろい。なかでも海邦智子「冬花火」は、捨て猫を媒介にした男女の心の触れあいを軸に、愛人として暮らす女の再生の物語。女性心理の綾が見事である。また岩谷征捷による作品評も見事である。同誌の今後の健闘を祈りたい。

「くれす」5号では望月諒子「初冬」が際だつ。もちろん望月がプロとしてデビューしているし、当たり前といえればそれまでなのだが、若い女性が赤ちゃんを誘拐する心理、そしてサスペンス調でテンポよく読者をひっぱっていく手法はさすがである。

「文芸長良」では20号、藤川五百子「菊代という女」、21号、山名恭子「寒樹の春」をおもしろく読んだ。藤川の作品は歓楽街で育った女性の短くはかない生涯を夢のように描いた作品。生の肯定感に共感を覚えた。山名の作品は熟年夫婦の危機を庭や樹木に喩えて上手に表現し、読んでいて心が温まるような豊かな感性が滲みでている。

「文学街」273号、274号、275号のなかでは273号の川島徹「北の街」に哀感をいだいた。三十八年間教員生活を送ってきた男を中心に、定年退職した男たちの夢物語を北の街に舞台設定し、雪に仮託した。何げない話だがせつない気持ちにさせる魔力を持つ。

「顔」69号、山崎文男「皮つき」も定年退職した男の話。故郷に戻った男はその土地の名産であるリンゴに思いを馳せ、昔なじみの女性と再会した経過を語る。リンゴの比喩とストーリーの確かさがこの小説を下支えしている。

「ざいん」13号、昨年八月発行だが、私の手元に今回送られてきたので読んでみた。井村敦「請願巡査」は、北海道の採石現場など現場で過酷なタコ労働を強いられている土木会社に頼まれて配置された巡査の話。請願巡査とは明治十四年に配置され、炭坑や鉱山

の治安維持のため企業や個人に配置を依頼される巡查のことで、昭和十三年には廃止された。題名がずばりで、請願巡査になった男の心のうちを描き、北海道で働くタコ労働の悲惨さを伝えた秀作。

「詩と眞實」731号、732号では731号の田井英祐「与吉の話」は十二枚の短篇だが、江戸時代の墓守とその幼馴染みの男の話で、人間の死骸を食べるといふ逸話が不気味で迫力がある。

「孤帆」16号、奥端秀彰「赤い響き」と淘山竜子「欲望と性格」。奥端作品は父の死後、遺品のデジタルカメラの一眼レフを手にして、そこに残した画像に思いを馳せる息子の話。父と子の普遍的テーマをさりげなく描いた。淘山の小説は、結婚した女性が女友だちとのさりげない付き合いのなかで、自己を見いだそうとする話。凝縮された場面を意図的に作りだすことと題名に工夫が必要かもしれない。能力のある書き手であるので惜しい。

「構想」48号、藤田愛子「晝と夜」。夫に対する覚めた視線と自宅近くの工場に勤務する青年への思慕の対比が見事。主人公が「六十歳の老女」と語られているが、高齢社会の現代、六十歳代はまだ元気であり「老」と規定するのがよいのかどうか。作品自体は視点が定まり書き手の筆の確かさを証明している。陽羅義光「道玄坂覚書」は、東電OL事件をうまく取り入れているが、象徴や寓意として描くのではなく佐野真一のノンフィクション「東電OL殺人事件」や久間十儀の小説「ダブルフェイス」のように正面から向き合っているであろう。彼女の心の闇はいまだに謎だから。

「文芸誌〇」45号、佐武寛「わたし、どうすればいいのよ」は大学の非常勤講師を勤めながら家庭を切り盛りする主婦の苦悩を明るくタッチで描く。夫は不況で勤務していた建設会社を辞めざるをえなくなる。子どもは育ち盛り、そんなときに夫は介護が必要な重い病に罹ってしまう。この明るさと背後にある不気味さはなんだろう。考えさせられた。この誌は今回の45号で終刊とのこと。二十三年間の活動に敬意を表する。

「海」（太宰府市）3号、有森信二「風の呼ぶ声」。鬱屈を抱えアルバイトに励む予備校生の男の子が路上で売っている絵に目をとめる話。彼の鬱屈の根拠、心の闇は深い。その情念がどこへ向かうのか。初期の中上健次を思わせるような迫力があり、抒情に流されずに人の心の不思議をこれからも描いてほしい。北里美和子「水位」もテンポがよく、ダム建設反対派を説得する役場の男の苦悩を描いて見事。

「木曜日」26号、没法子「欣求浄土」も新興宗教を素材にしたエンターテイメントの近未来小説と読めるが、話が長いような気がする。扱っているテーマはおもしろい。

「たね」39号、成井透「夢のなかの狂宴」。職場で「惚けなす」とよばれている男は年齢を偽り食肉市場のガードマンをしている。その男の仕事をめぐる日常を描いた作品だが、過酷な労働、職場の人間関係、食肉市場で処理される動物などをめぐり人間の心の不可解な闇へ降りていこうとする意思が読み取ることができる秀逸な作品。

「海峽派」118号では、中元大介「海鷹よ眠れ」、若窪美恵「昼の蛍」、高崎綏子「七十五歳の叛乱」が、それぞれ書き手の個性が際だっておもしろい。中元作品は少年が見た

昭和二十年八月の航空母艦「海鷹」の姿。「昼の蛍」は障がい者の作業所に再就職した五十歳の女性の職場をめぐる話で孤独な心模様が蛍によく比喻されている。高崎作品も六十歳

で初婚の女性の語り口調で、十三歳年上の夫が亡くなってからの孤独な生活を描く。語り口調は軽妙だが悲しい。

「河」155号、久保順子「高層の長屋」は、中学生の男の子の視点で母方の祖母の面倒を見る話。長く下町の軒を連ねた長屋住まいの祖母が再開発で高層マンションに一人住まい、母が心配するのだ。そのなか主人公の出生の秘密なども明らかになってくる。老、孤、シングルマザー、コミュニティなどのテーマが浮き彫りになっている。

「文藝軌道」4月号、高橋ひとみ「遠ざかる明日」は有料老人ホームの経営の実態や職員の間関係を描く。よい素材なのでさらに深い人間洞察を期待する。野上卓「妻と蓑虫」は、間もなく定年を迎え出世コースからははずれた大企業の社員が、ある日妻が引き籠もり蓑虫になるという話で短いがすっきりとまとまっており、蓑虫との比喻も効いている。

「佐賀文学」27号の山川文「菜の花」は農家の嫁が直売所に野菜を出荷し、そこでの人間関係や家族問題に悩む姿を描く。テンポがよくストーリーも明快。坂本紀美子「蛇紋岩」は夫婦仲の悪さに悩む妻の孤独を岩に託して話を展開させる。こちらもテンポがよく、人間観察がよくできている作品。柳原忠行「少年と母の物語」は、小学校六年の男の子が母親とともに家を出て旅館で住み込みで働くことになった思い出を語る。母への思慕がよく表現されている。同誌には多くの作品が掲載されていて内容が充実している。

「じゅん文学」64号の有芳凜「余り石」は、五十歳代の語り手の男性が父の田舎を四十年ぶりに訪れる。十歳のころ、祖母とふたりで一年足らず暮らしたことがあった地である。そこで着ものを仕立てながら店を開く訳ありの三十代の女性に、家を出た母の像を重ねた少年時代を回顧する話。母に似た女性への思慕を叙情的に描き文章に無駄がなく秀逸。なお同誌はネットで同人を募り全国から作品が寄せられてくるという。すばらしい取り組みである。

「たまゆら」79号は、倒産失業した男の鬱屈を描く金川紗和子「地平のむこう」、語りの特徴を生かした武田民子「おちよる船」の二篇が目立った。

「孤愁」7号、豊田一郎「イルミナシオン」、この題名を聞けばランボーを思い出す方も多いはず。もちろんフランス語であり、英語では「イルミネーション」、いわば電飾、いまはやりのライトアップである。ランボーの詩には「天啓」の意味があるのだが。通信社のフランス支局に勤め、パリにいたる男がフランス人女性と恋におち、こどもができる話だが、ストーリーが問題なのではなく、電飾に象徴される闇と光の本質、男女の愛、文化や民族的な考え方の相違など、差異を見せることにより人間の本質、謎に迫ろうとする作品。

「視点」73号、筑紫亮「愛のゆくえ」は、過去が原因で耳の中に羽音が聞こえる女性の話で、ストーリーよりその聴覚の感覚がおもしろく、五感を生かした描写が頷ける。

「全作家」78号、吉村まど「ゆがんだ鏡」は、十五歳年下の男性を付き合う女性の現実と非現実の境界を淡く描く。叙情に訴えた心理の綾が見事。

そのほか作品名、著者名は挙げないが気になった優秀な誌を挙げておく。

「春風」24号、「習志野ペン」89号、「柵」282号、「北斗」五月号、六月号、「碑」94号、「断絶」106号、「時空」32号、「青灯」62号、「風」83号、「鳥語」60号、「蠍」49号。また原石寛の「自選作品集」が完結した。手書きの原稿をコピーし製本し各界に届ける努力と文学への執念に敬意を表する。また荒井登喜子は酪農雑誌に連載小説「エスケープ」を発表し独自の位置を占めている。同作品は、酪農家の夫と結婚し十八年の歳月が流

れた妻の視点で書いていて、この先物語がどのように展開するのか楽しみ。

最後に同人雑誌評について述べたい。「文学界」の同人雑誌評は終了したが「三田文学」、「季刊文科」、「文学街」そして本誌などで活発に取り上げられており、書き手の希望の灯となればと願う。また自らの同人誌について外部の批評家の意見を掲載する「札幌文学」、「九州文学」などにもエールを送りたい。そして合評会で出た意見や感想を必ず掲載し、そのコーナーだけでひとつの織物のように成立している「誌と眞實」のような誌もある。

十月には徳島県三次市で全国的な集まりが開催されるそうである。私は組織論や活動論にはまったく興味はないが、全国の書き手の励みの場となれば、と成功を願う。多忙なため参加できないのが残念。

また私宛にお送りいただいた単行本のなかでは雨宮湘介『夏の月』が叙情的な作品を網羅し印象に残った。

今月の優れた作品は以下のとおり。全作家賞受賞作品の米沢朝子「水際まで」、望月諒子「初冬」は両作ともベストワンに値するが除いた。今月も作品が多く、ベスト6とした。

成井透「夢のなかの狂宴」、野沢薫子「沈む……沈む」、海邦智子「冬花火」、有芳凜「余り石」、野上卓「妻と養虫」、有森信二「風の呼ぶ声」、

評論では皆川勤「物語としての〈歌〉中島みゆき・断想」、ほり啓「『象の消滅』あるいは世界の顕現」の両作がベストワン

「心が出ちゃった」作品を期待している。もとより加藤宗哉が語るように小説である以上、他者に伝わらないような一人よがりの文章や自分史作品では話にならない。読後、しばしその作品世界を浮遊し、読者も「心が出ちゃう」ような小説を望む。時代は希望がないかもしれない。だがしかし、文学の希望は私たち一人ひとりの心のなかにある。

筆者プロフィール..

文芸評論家、放送作家、NHK学園自分史講座講師。現在時事通信、北海道新聞、東京新聞で書評を担当。テレビでは愛川欽也、武田鉄矢、中西哲生などのレギュラー番組の企画・構成、台本制作を担当。人気番組「愛川欽也バックインジャーナル」ではコメンテーターとしても毎週レギュラー出演中。ラジオでは東京FM「クロノス」で、文学や読書に関するトークを展開。著書「村上春樹とドストエーフスキイ」「新宿小説論」ほか、共著「立松和平 ドロップアウト」「立松和平 文学の修羅として」ほか。また武田鉄矢、北野大とともに地域活性化のトークショーを佐賀市や北区で開催。ホームページは、ネットマガジン「週刊！横尾和博」、「横尾和博の赤羽B級グルメ物語」。